

<p><b>現代中国学は何を目指し、 何を実現するか</b></p> <p>Discussant Environmental Group</p> <p>KAYANE, Isamu 榎根 勇</p>	<p style="text-align: center;"><b>これまでの地域研究</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>科学の母を自称していた地理学は、自然地理学と人文地理学に分裂し、自然地理学の各分野は物理的科学的でありたいと努力する過程でさらに細分化され、現在、再統合の過程にある。人文地理学も同様の経過をたどってきた。</li> <li>また地域の研究者は、独自の学問分野の確立を目指して、日本学術会議に地域学研究連絡委員会を設立したが、「地域研ニュース」(1995-2001)の紙面での議論を見る限り、独自の研究分野を確立し得たとはいえ、依然として努力の過程にある。以上の経緯は、「20世紀型科学」の限界を示している。→ 新しい地域学の構築が必要</li> </ul>
--	---

【図表 1】

<p>ケン・ウィルバーの『万物の理論』の枠組み</p>	
<p>私(左上象限) 意識 志向的 主観性 Mind sciences</p>	<p>それ(右上象限) 脳と組織 行動的 客観性 Hard sciences</p>
<p>私たち(左下象限) 文化と世界観 魔術的、神話的、合理的 間主観性 Humanities</p>	<p>それら(右下象限) 社会システム 国家、地球的、社会的 間客観性 System sciences</p>

【図表 2】

<p>地域の研究と、環境の研究は、 共に「万物」を対象にしているが、</p>	
<ul style="list-style-type: none"> <li>私(中国人の意識) COE-ICCSでは、この象限の研究が欠けている(地域には人間が生活しているのに)。</li> <li>私たち</li> <li>文化研究会</li> <li>環境研究会</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>それ</li> <li>環境研究会</li> <li>それら</li> <li>政治研究会</li> <li>経済研究会</li> <li>環境研究会</li> </ul>

【図表 3】

**アーヴィン・ラズロの新しい哲学**

- 非二元論、汎心論、量子論
- 外部環境の変化は、生物の内部環境にも反映される
- 遺伝子と環境の相互結合
- 生命体と環境との根源的な相互結合性
- 唯物論と観念論の相補性 (complementarity)
- 心と身体の相補性＝東洋医学の考え

【図表 4】

**情報とは？**

- 情報(information)とは、形態(form)の導入、関係の流れ、メッセージの伝達である。
- 情報は物理的存在なり。(Rolf Landauer, 'Information is Physical', Physics Today, 1991)
- 情報はエネルギーである。
- 電子ビットから量子ビットへ。

フォン・バイヤー『情報の宇宙』, 2006.

【図表 5】

### 中国学情報基地の構築

iccs.com

- 資本主義にも、環境問題にも、社会システムの安定化にも、倫理性が必要である。
- 情報の共有化が倫理性確立の基本である。
- 情報技術の進歩は今後も続く。  
(多言語検索データベース、Google Earth、双方向性、Web.2.0 etc.)
- (環境)情報の無料化と共有化≒教育

【図表 6】